

一般審査員 劇評A (TTさん【男性、自営業、40代】)

★観た順番・れんげ→猿ロマン→ACT→ぴかぴか→Godsound

● ぴかぴか芝居塾2009『クローバー』

【観劇：22日・13：00の回】

- ・ 出演者の皆さんについて知るところはひとつもないのですが、演技者としてピカデリーホールの舞台に立ち、客席からの視線を浴びるという経験、殆どの方にとって初めてのものと推察します。まずはピカデリーデビュー、松本演劇シーンへの最初の一步を踏み出したこと、おめでとうございます(拍手)。
- ・ この文章を書いている者も、かつて同じ体験をしました。ひとことでは言えない色々な記憶が、この日の舞台を観ているうちに、ぼろぼろと思い出されてきました。此処に至るまでに皆さんの中に刻み込まれたであろう様々を、どうかいつまでも、大事に。
- ・ ひとりひとりの緊張が、全編を通じて伝わってきました。緊張と戦いながら、誰もがひとつの台詞を、言葉を、丁寧に伝えようとしている、そのさまにとっても暖かなものを感じました。その一点においてこの公演は「成功」である、と思います。この暖かさを生み出したのは、勿論スタッフの皆さんでもあるわけで、つまるところ舞台上に出現したのは「作品」というより、そこに携わった多くの人々の結晶、だったのかもしれませんが。結晶が放つ熱が幸福感になって、観ている此方をも、暖かい心地よさへと導いてくれたのでしょう。
- ・ とは云うものの「作品」は「作品」。観ていて躓(つまづ)きを感じたこともまた否めません。
- ・ 物語と設定の全てが、事実上台詞による説明だけで行われるは、些か勿体ない、と思いました。物語を引っ張る鍵／象徴と云うべき、クローバー・三つ葉・四つ葉と言葉で繰り返されても、なかなかイメージが広がってこない。例えば<視覚>に訴えるような方法はなかったでしょうか？何もクローバーと写真で見せろ、といった話でなく、それを喚起させるような<景色>を出現させることはできなかったとか？と。
- ・ <旧人類>が浴びたら生きてゆけぬ、この世界の<光>とは？<新人類>を「新」たらしめる特徴の類はないか？<破棄>以前と以後の世界／人間を、より明確に対比させる要素。それもダイレクトに観客に伝わるような「何か」があれば。物語の強度は増して、結果、終幕の<光>はさらに美しく力強く輝いたのではないか、と思うのです。
- ・ 俳優たちの表現力に委ねる方法は、あるいは確信的なものでしょうか？この公演の性格や制作上の条中等がそうした観せ方を必然とする方向へ向かった、という推測もしないではないのですが。
- ・ 卒業生たちの学びの成果としての「今」を見せることこそが「核」なのだ、との思いも持ちました。彼ら彼女らを見よ。そう考えるとシンプルに徹した舞台装置にも納得がゆくところです。じっさい、そこに在る俳優たちの姿は、感動的なものでした。
- ・ ただ、作品が持つテーマやメッセージ、物語性といったものの伝わりが、やや弱いものになっている印象は拭えず、やはりそのことには勿体なさを感じるわけです。
- ・ <旧人類>、障害を持つ人、他者と上手く係れない人、四葉のクローバー。「普通と違うもの」=異物排除への異議申し立て。極めて真っ当な意思を、銜(てら)うことなく真っ向から投げかける、そのど真ん

中な熱さは、ひねくれの過ぎた身には、少々眩しいです。しかし、このストレートな姿勢こそが、創り手の個性と美質であり、この公演には、それが何よりも必要なものだった、と思います。

- ・カーテンコール、舞台上に並ぶ人々の姿は、真っ直ぐに伸びていこうとする植物のようにも見え、その真っ直ぐはとても綺麗で、何かかひどく羨ましいものでした。
- ・演劇人として良きスタートを切られた皆さんお疲れさまでした。これからの歩みが喜び多きものでありますよう。
- ・スタッフの皆さんお疲れさまでした。各々のホームグラウンドでの活動が、今回の公演を経てさらに充実したものになることを、期待いたします。

● Godsound+Studioend 『生きてゐる小平次』

【観劇：22日・14：30の回】

- ・初めて観る劇団、予備知識はほぼ皆無です。
- ・今までに観たことのないものを視た、という思いで、少なからぬ興奮を覚えました。鈴木泉三郎(原作)の作品は一応読んでおり、しかし演じられた形で観たことはありません。文字を読むことで漠然とイメージされていたものが、一気に塗り潰され、より鮮明な物語として頭の中に刻まれたような気がします。
- ・人間と人形の関係性を、とても面白く思いました。愚考するに、人形芝居ならば操る人間は黒子、その存在を消すもの、かと。しかるに本作、人間の顔は露出して、多くの場合人形の後ろにある。此方はどうしても、人形と人間の動くさまを、同時に視界に入れて、意識します。顔のみならず、舞うように動く人形の身体と、足を踏ん張り腰をひねる人間の体を。ふたつの身体は、右の手を共有しています。人形の面は表情を変えず(当たり前ですが)、人間の貌(かたち)もストイックを貫くなか、右手が豊かに動いて感情を示す。さて、その手は誰の手か？
- ・舞台上に在るものが、人間でも人形でもない「何か」に視えてきて、何やら怖くなってきました。実に心地の良い怖さです。
- ・「何か」のなかで人間と人形が闘っていて、さらに「何か」同士が闘っている。物語られるのが抜き差しならぬ愛憎ときて、一幕は濃厚な闘争の気に満ち、その力感に打たれました。
- ・不気味と愛嬌を併せ持つ、人形の造形が魅力的です。あの小平次が物陰からこっちを覗いていたら怖かろう、でも可愛いやつと思うこともあるかもしれない。動かぬその貌に、想像力が膨らみました。
- ・縁者の皆さんの、重心の低い動きが印象的でした。足腰の強さなくして、この演劇は成立しないだろうな、と思います。その強靱さはまた、一本太い芯の通っているさまとも見え「太さ」が作品の見応えに直結している、と感じました。
- ・舞台上の「何か」は、危ういバランスのもと、出現している、と思います。人間と人形の均整がときに崩れて、人間がぐっと前面に現れる時がある。そこに、ある「におい」が漂うのを感じました。どうも言葉にしがたいのですが…。強いて申せば「アングラ感」、というか。例えばセックス描写の、抽象であるにもかかわらず奇妙に即物的な絵面。終幕で唄い踊る(ファドでしょうか?)小平次はもはや小平次ではなく演者の女性そのもの(お名前は存じ上げず失礼)で、その姿から立ち上る生々しい生理、直撃を極める下品さ。そうした「におい」には、埒かの息苦しさやたじろぎを覚えたのですが。
- ・しかし、そのような違和感めいたものも含めて、とても面白い、と。何かしらの過剰さや歪つさに、此方

の感情の何処かが揺さぶられることを、嬉しく思うものです。

- ・カーテンコールに笑いました。それまでの物語を思いっ切りコンパクトにまとめた唄の、あんまりなミもフタも無さ。醸成された緊張が吹き飛んで、何やら間抜けな（失礼）味わいの空気に。人形もニンギョー然として、得も云われぬ莫迦莫迦しさが吹き出した、と見えました。しかもそこにはなお直撃さがあり続け、ああ、最後まで「太い」芝居、と、感服した次第です。
- ・太鼓・親指ピアノ・レインスティックによる、音の使い方が効果的でした。このトーンで貫くような世界も、観たく思います。
- ・お疲れさまでした。未知、異形のわくわく感を与えてくださったことに、深く感謝いたします。次に描かれるのが如何なる世界か、何を視せてくれるのか、楽しみにさせていただきたく思います。ありがとうございました。
- ・ひとつ、気になった点。「安積沼」を「あさか」ではなく「あづみ」としたのは、何かの意図があったのでしょうか？

● 劇団 ACT 『人間失格』

【観劇：21日・16：30の回】

- ・ 沖田総司を主人公に、「人間失格」を語り直す着想と試み、非常に興味深いものでした。原作中のフレーズが印象的に織り込まれ、「新撰組」の物語に太宰治が濃く薄く染み出している、といった印象を受けました。
- ・ 沖田総司が「恥の多い生涯を送ってきました」と独白します。これは愚考私見の類ですが、大庭葉蔵の「恥」は、隠して苦しみばれるを怖れる、云わば自意識過剰をこじらせた態のもの、と思います。では沖田は？彼も苦しみ悩みます。近藤勇の漏らした「使えぬ奴」との呟きに。同志の命をその手で奪うことに。自身に迫る死の影、生へのあられもない執着に。
- ・ ここでの彼の苦悩「恥」はすべて、「稚（おきな）さ」と云う所に集約される種類のものであるように感じました。実際、近藤をはじめとする劇中の人物たちは、彼を「コドモ」と見做し、扱っています。沖田も、自身の「未熟」に苛立ち続けている、そんな風に見えました。
- ・ それもまた確かに、自意識過剰こじらせ状態ではあるのですが。葉蔵のくだくだしい考え過ぎぶりと、沖田のそれは、似て非なるというか、対照的なものであるように思えます。
- ・ この「稚さ」のなかに、「汝個人のおそろしさ、怪奇、悪辣、古狸性、妖婆性」はあったでしょうか？
- ・ 「未熟なコドモ」とは、云い換えると「バカ」でもあり、いつそ沖田総司がもっと底浅く薄っぺらであったならば？その苦悩のスカスカさが、あるいは裏切りに満ちた「人間失格」を出現させるのでは？舞台上の、真摯で愚直でナイーブな沖田の姿に、そんなことを想像しました。
- ・ では「オトナ」たちは、悪辣な古狸であったり妖婆であったりするのでしょうか？舞台上に展開したのは、ごく正攻法の「新撰組物語」であったように思います。芹沢鳴の情夫のお梅を沖田が人質に取る、などは新味ながら、基本的にはこれまで様々に語られ続けた物語かと。男たち女たちの情念は丁寧に描かれ、そのドラマチックな説得力には、劇団の力をひしひしと感ずる、のですが。
- ・ 「人間失格」というものを頭にして考えた時、さらなる大胆不敵の境地をこそ観たかった、と思うわけです。太宰治の言霊を得て、誰も観たことのないような新撰組がその異貌を現す！まこと勝手な言い草ですが、そんな衝撃が欲しかったのですね。沖田総司と「人間失格」、さらにおそらくは太宰治の生涯

- までも、まとめて面倒見よう、という「志」にわくわくし、此方も妄想が膨らんでしまう次第でした。
- ・ 舞台空間が、美しかったです。ごくシンプルかつスタイリッシュ。俳優たちの動きとも機能的に連動しているように見え、洗練を感じました。ソリッドはなかに確固たる美意識があり、それがまた此方の想像力を喚起する大きな要素になっています。
 - ・ 「美意識」という言葉を使いましたが、作品全体がその部分での強い統一感に貫かれているように思いました。「芝居は生き物」とは珍しくもないトリックでしょうが、まさに文字通り、目前に在ったのは「劇団ACT」という名の「人格」を持った生命体である、と思います。俳優の皆さん、いずれも熱さに満ちた力演と見えましたが、個々の方への感想がなかなか浮かびません。全員の眼が同じ光を宿して同じものを見つめている。高度に集中した意識たちが、見事に統合、統御されて、揺るがない作品世界を創造している、と感じました。その強固な構築力が「ACTという人格」ということです。それについては「完成度の高さ」と云い換えることもでき、その緊密なありようには、ある種の「凄み」を感じました。
 - ・ ここまで書いてふと、「劇団ACT」と「新撰組」に、どこか重なり合うものがあるような気がしました。何となく、ですが。
 - ・ 自作以降の「ACTという人格」（此方が勝手に思っているだけですが）どんな貌を魅せるのか、とても興味深く思います。まずはお疲れさまでした。刺激を与えてくださったことに感謝いたします。

● れんげでごはん『珈琲とか紅茶とか』

【観劇：21日・13：30の回】

- ・ 「女性にとって幸せとは何か？」。近代から現代まで考え、語られ続けている問題ですが、重く難解な事になりそうなテーマを、大上段に振りかぶった「社会」方面で無く、あくまで「個」の物語として提示する、その慎ましさに、好感を覚えました。
- ・ 公演会場が、演劇をするにはかなり自由度の低い空間、と見えました。全体の狭さ、動けるスペースの限られた感じ、滑りやすそうな床。人物の出入りの処理（空間上および物語上）に、不自由さをむしろ積極的に利用していこうとする工夫を感じました。
- ・ 今回のような「場の小ささ」は、「れんげでごはん」という劇団の現在には、事情に良い形でマッチしているように思います。ピカデリーホールでの前作に、やや空間をもてあまして印象を受けたことも、そう思う一因です。
- ・ 「小さくまとまる」とは、普通はあまり良い意味でつかわれぬ表現ですが、本作については、そのことが大きな魅力になっている、と思います。「小ささ」が劇団にまとまりをもたらすことになっていて、そこが「れんげでごはん」の個性と美質を産み出している。団員の皆さんも自覚されていることではないか？と想像するのですが。
- ・ 俳優陣の着実な成長、を感じました。
- ・ 宮澤さん、コメディエンヌ的個性に磨きがかかる。表情の明るさや口跡のよさに、自信の深まりを見ました。
- ・ 渡辺さん、これまでに観た姿より格段に肩の力が抜けて、軽みが増していると。どこか浮世離れた風情が面白いです。
- ・ 西村さん、朴訥の佇まいは、得難いパーソナリティでは？観る者を油断させる自然体を維持していつてほしく思います。

- ・ 遠藤さん、以前に仄(ほの)か見えた硬さが消えて、立ち姿がより滑稽に見える。様子の良さとおかしみの共存が、いいな、と。
- ・ 加藤さん、「優しく見守る者」を演じて、右に出る者なしの感。少ない出番に自分の空気を作り出せるのは、巧者と思います。
- ・ 例えば、加藤さんが終始、宮澤さんに寄り添って出ずっぱり、といった形も観たいな、などとも思いました。登場人物に視えない存在がいたり、あるいはメタフィクショナルな構造をより深めたり…。観ている此方の中にも想像力が広がり、それはなかなか楽しいことです。
- ・ これまでの作品、そして本作でも感じるのは、「等身大」を常に意識しているのかな、ということです。現時点での「やりたいこと」と「できること」のバランスをしっかりと見据えるところから作品創りを進めていく、クレバーかつスマートな人たち、と。
- ・ そのような事を思うのは、やはり、目の前で演劇する皆さんの姿が、とてもものびのびしたものに映るから、です。徒らな緊張が無く、いや、緊張感自体ははっきりあると思うのですが、それをエゴイスティックに強いてくるところが無い。そこから滲んでくるのは、何となく「いい感じ」です。現在の「れんげでごはん」が持つ美点であり、強力な武器、と思います。
- ・ 「いい感じ」や「小さくまとまる」は反面、安易な保守化やマンネリズムに陥る可能性を持ってもいる、とは思いますが。ま、余計なお世話ではありまじょうが。
- ・ 「れんげでごはん」の好調はそのクレバーさにあり、とは前述したところですが、それを支えるのは「風通しの良さ」ではないでしょうか。ただ、そんなふうに見えます。推察でしかありませんが。
- ・ 今後、現路線が深化していくのか、大胆な裏切りをみせるのか。いずれであれ、充実の状況が続くことを期待、祈念いたします。
- ・ お疲れさまでした。自作ではフルメンバーがそろうのでしょうか？

● 劇団ザ?猿ロマン『スリーウィッシーズ』

【観劇：21日・15:00の回】

- ・ 「謎」のボールを観客に投げ込むところから。「劇団ザ?猿ロマン」の得意とする手法、という印象を持っています。
- ・ 「世界を救わねば！」と、焦り歎き喚く青年は狂人か?いや、狂っているのは世界の方か?本作の「謎」は解かれるよりも、反復されることで答えを失い、「悪夢」にすり替わる。足元が崩れてズブズブと穴に嵌り、正気を失くして酩酊の奈落へ?中途からそうした物語と見定めて、舞台を注視しました。
- ・ 「彼」を軸とする世界と「彼女」が軸である世界のシンプルな反復。それが無限に続くのでは??という不安が、じわじわと恐怖を呼び起こすはず、と。
- ・ しかし、繰り広げられたのは、単純ならぬ単調な反復だった。と思います。奈落の深みには落ち込まず、頭の芯は醒めて、酔いきれぬまま…でした。
- ・ 不安や不穏の空気が、恐怖へと増幅していかない。戸惑いめいたものばかりが、舞台に浮遊しているように感じました。冒頭のコミカルな味も結果的にスパイスとならず、どこか、ちぐはぐなことに。
- ・ 単純さが呼び起こすのは酩酊感ではなく、退屈感です。「まじめな人って、タイクツ」。単調の原因は、あるいは「真面目さ」かも知れません。
- ・ 「彼」は終始、混乱している人に見えました。「彼女」は終始、追い詰められている人に見えました。「終始」

です。一定線から動かないデフォルト感、とでも申しましょうか。オモけんさん、NAOさん共に、生硬さの薄れたいい表情が浮かんでいて（インプロの成果でしょうか）、それだけにトーンの変化が感じられなかったことを惜しく思います。デフォルト感から伝わるのは、演技者の賢明さや誠実さで、勿論それはとても大事なことです、この作品から立ち上るべきはそういったものではないだろう！と。

- ・ 「オズの魔法使い」のダイレクトな提出もまた、「真面目さ」かもしれません。例えば視覚的なヒントを散りばめたりすることで、より「不親切」に徹したならば、物語の謎めき具合、作品の迷宮感は深まったのではないのでしょうか。
- ・ 個人的希望として、この作品ならばもっと「もやもや」したかったですね。帰途、見慣れた風景がぐにゃりと歪んで見えるような。何かしらの異形なる感触が観終わった後も残り続ける、本作の「肝」はそうしたものであるように思うのです。
- ・ 異形の驚き、ということについては、終幕に出現する「景色」に瞠目しました。忽然と浮かび上がる緑色は不穏に美しく、不意打ちの快感ともども、此方をゾクリ、と揺り動かしました。舞台という空間ならではの、魅力ある「画」だった、と思います。
- ・ 今作品自体からは少し離れますが、以前観た2回の公演に些か首を傾げ、心配を感じました。何だかひどく無理をしているように見えたからです。間違いなく演劇が好きな人たちなのに「演劇する喜び」が伝わってこない、というか。内容がどちらも喜劇性の強いものだっただけになおさら。
- ・ 今公演では、そうした痛さがずいぶん払拭されていたと感じ、ちょっと安心しました。あるいは本作のシンプルさが、良い方向に作用しているのでしょうか。現在の身の丈に合っていた作品だったのかもかもしれません。
- ・ 外野の勝手かつ失礼な想像ですが、猿ロマンは苦闘を続けているように見えます。その現状がプラスの方向に転化をしたなど感じられるような成果を見たい、と思います。ただ期待するばかりです。
- ・ ともあれ、お疲れさまでした。演劇する喜びをその手に取り戻されんこと、切に願います。